

女装するようになったのは、去年からだ。仕事が忙しくて帰りが遅くなる日が続き、三年付き合っていた彼女に愛想をつかされた。半同棲の生活だったから、彼女に出ていかれた後は胸にぽっかり穴が空いたみたいで寂しかった。

そんな寂しさにも慣れた頃、彼女が「捨てておいて」と言い残して置いていった荷物を休日に片付けた。袋の中からは古い服や化粧品が山のように出てきた。懐かしさから思わず手に取り、眺めているうちに「これ、俺にも着られそうだな」と思ってしまった。試してみると、ウエストが少しきつかったけれど、何とか着ることができた。

ノースリーブの黒いシンプルなワンピースは、思いのほか自分によく似合っていた。そのことに松岡は驚いた。面白半分、口紅を塗ってみるとそれがまた色の白い自分に映えて、人形みたいに見えた。こうも似合うと面白くて、ファンデーションやマスカラも適当に使ってみた。そうして出来上がったモノは、自分の知らない自分の姿。女の人でも滅多に見たことがないほど美人の『松岡洋介』がそこにいた。

別世界にいる『もう一人の美しい自分』に、松岡は自分でも驚くほど急激にのめり込んだ。通販で服や下着、化粧品を買い、雑誌でメイクの研究をした。髪だけは営業の手前、伸ばせないのウイッグを用意した。頭の前から爪の先まで女になりきる時、松岡は『日常』の自分を忘れた。人が振り返るような美女に変身するのは快感で、いいストレス解消になった。

アブノーマルな趣味だという自覚はあるので『女装日』は金曜日だけと決めた。週に一度と制限することで、女装への欲望と嬉しさが余計に増した。

金曜日の夜、松岡は入念に体の手入れをして女になる。最初は家の中を歩き回るぐらいだったが、だんだんと外へ出ていきたいと思うようになった。欲望は抑えきれず、とうとう女装のまま表へ出た。

街を歩けばみんなが振り返る。注目されるのがうっとりするほど心地よかった。女性よりも美しいという優越感にひたりながら、やに下がった男の視線を腹の底であざ笑う。

空席が目立つ、都内に向かう電車の中で、今日は何人の男に声をかけられるだろうと、想像するだけでわくわくした。

…とうとう雨が降り出した。松岡は繁華街の外れにある路地の角でうずくまったまま、込み上げてくる嘔気に任せて吐いていた。自分の吐いたものの臭いに刺激されて、また吐く。吐ききると落ちていてよるよると歩き出すけれど、数十メートルも行かないうちにまた気分が悪くなってしまうがみ込む。

さつきから同じことを何度も繰り返している。買ったばかりのシャツと黒いスカートも汚れて、綺麗に仕上がっていたメイクも涙でグシャグシャ。最悪の上に超のつく最低な気分だった。繁華

街に着いてすぐ、松岡は四十歳前後の男に声をかけられた。普段は無視するけど、今日はにっこり笑ってついていった。営業先で見たことがあったからだ。いつも自分の足許を見ている担当がその男にやたらと低姿勢なのが気になって、仲のいい社員に「あの人って誰？」と聞くと「高嶋物産の営業部長」だと教えられた。

高嶋物産は松岡が是非とも繋がりを持ちたいと思つた企業で、何度か営業に出向いたことはあるもののいつも門前払いを食らっていた。仕事の話はできないが、趣味や好みを知ることができれば、それが新規開拓の突破口になるんじゃないかという下心が働いた。

男に連れていかれたのは、高級ホテルの屋上にあるカクテルバーだった。松岡は勧められるがまま酒を飲み、当たり障りのない世間話をした。

「君さ、ハスキーボイスだね」

そう言われ、一瞬ドキリとしたが「風邪気味だから」と誤魔化した。いくら姿形は完璧でも、声だけではどうにもならない。そのうちばれるのではないかという不安から松岡は次第に無口になり、気まずい雰囲気を埋めるために酒ばかり飲んでいった。いつもビールかチューハイなので、飲みなれないカクテルで悪酔いするのに時間はかからなかった。

「うわあああっ」

男の叫び声で目を覚ます。気づけばホテルの部屋の中、松岡はダブルベッドに横たわっていた。股間にいつも以上に開放感があると思つたら、スカートがたくし上げられ、レースのショーツが

太腿までずり下げられていた。

「おっ、お前は男かっ」

松岡は全身から血の気が引いた。ショーツを慌てて引き上げ、ベッドから下りる。だけど酔っているせいか足許がおぼつかなくて、膝からガクリと崩れ落ちた。

「人のこと騙しやがって。この変態野郎っ」

男が顔を真っ赤にして飛びかかってきた。腹に乗られ、胸許を掴んで顔を平手打ちされる。髪を掴まれると同時にウィッグが外れ、男が拍子抜けしている間に突き飛ばした。

床に落ちたウィッグを拾い、部屋を飛び出す。エレベーターへ辿り着くまでに二回転んだ。追いつかれなかったことにホッと肩で息をしていると、エレベーターで同乗した中年女性が、松岡が手にしている長髪のウィッグを見てギョッとした顔をした。その場をかぶりなおしたものの、鏡がないのでちゃんとつけられたかどうかはわからなかった。

ホテルを出て、フラフラしながらも懸命に歩いた。途中で気分が悪くなつてしゃがみ込み、何度も吐いた。男に殴られたことを思い出すたびに、背中が震えた。自分のしていることが普通だとは思っていない。だけどもあんな風な仕打ちを受けるとは、暴力の対象になるなんて思わなかった。一刻も早く帰って服を脱ぎたい。もう女装なんて一生しない、そう思った。

財布の入った女物のハンドバッグとハイヒールをホテルに忘れた。マンシヨンの鍵はダイアル式のロックがかかる郵便受けに入れてきたので部屋の中に入ることはできるが、現金がないとタ

クシーに乗れない。終電はもう出てしまっている。友達に金を持ってきてもらおうとしても、携帯電話は今日に限ってマンションに忘れてきた。それ以前に：松岡は苦笑いした。この格好で友達に会う勇気が自分にあるだろうか。あの男のように『変態』と罵られるぐらいなら、死んだほうがマシだった。

路地にしゃがみ込んでいても、誰も声なんかかけてくれない。背筋をピンと伸ばして歩いている時は、後を追いかけてくる男までいたのに：そう思うと、所詮この姿は偽物なんだと思い知らされた気がした。

目の前を集団が行き過ぎる気配がした。その中から覚えのある声が聞こえた気がして、松岡は反射的に顔を上げた。男女が交ざった七、八人の集団の真ん中に、福田がいる。仕事の帰りにみんな飲みに出たのか、福田は半袖のシャツに紺色のネクタイ姿だ。チラと松岡を見たものの、福田はスッと視線を逸らした。そのまま行き過ぎる。

自分だと気づかれるのも困るけど、無視されるのも切なかった。だけど福田を責める気にはなれない。もし自分が同じように道端で、酔っ払ってしゃがみ込んでいる女を見つけたとして、声をかけるかと言われたらやっぱり無視するような気がしたからだ。

無視されてよかったんだと自分に言い聞かせる。声をかけられ、自分だと知られていたらきつと軽蔑される。それだけならまだしも、ほかの同期に告げ口されたら噂になるかもしれない。たまに飲みに行くし、会社の中では親しく付き合っている方だけど、あの男を心の底から信用はし

てない。

しばらくすると急に雨の当たりが弱くなった。パラパラと傘が雨粒を弾く音がする。顔を上げると、一人の男が自分に傘を差しかけてきていた。年は三十四、五か、冴えない髪型の垢抜けない男だ。ネクタイも右に少しよれている。どこかで見たことがある。さつき：福田と一緒にいた男じゃないだろうか。

「大丈夫ですか」

大丈夫：と言おうとして、思い留まった。もし声で男と知れたら、また変な目で見られる。松岡はコクリと頷いた。

「さつきも見かけて：その：よかつたら送り返しましょうか」

願ってもない申し出に、大きく頷く。右手が差し出されて、その手を取った。温かい手だと思ふ反面、酔い潰れた女を送って、そのままコトに及ぼうとしているんじゃないかという疑惑も消えなかった。

「靴はどうしたんですか？」

男は松岡の裸足にさつきが気がついた。ホテルに忘れて取りにも行けないんだとは言えず、ただ首を横に振る。すると、男はその場で自分の靴を脱いだ。

「かつこ悪くって嫌かもしれないけど、何か踏んづけて怪我をするよりはましだと思います。僕は靴下を履いているし：どうぞ」